

歪な指輪

岡本 悠

進は愛しかたが、わからなかったただけだ...

病院の診察で、会計を待っていた

そこに、直子があらわれて、

「元気？」

と、声をかけた

「ああ」

進と直子が出会ったのは、

入院した病院の中だった

2人でベッドに隠れたりして遊んでいたら

看護師の女性に怒られたが

俺は、その看護師を罵倒すると、「もう戻ってください」と言われたが

直子は1人で叱られてしまった

その後、直子はこの一件で

「直人君ズルいよ」

と、拗ねていた

忘れたころの出会いだったが、

2人は、よく会話をするようになった

ある日、俺が突然

「俺、直子ちゃんの彼氏になるよ」

と云った

直子は、おじさんたちから人気だった

ある日、「君は、僕たちのマスコットだよ、と言われた」と言って

応じると

「ひどいよー」と云った

俺は、あれ、そうなんだ、と、ちょっと不思議だった

直子は実家に住んでいた、

バスに通って、毎日通ってきた

俺の家は病院のすぐそばだった

次第に、一緒に過ごすようになった

セックスをする際には、

部屋が狭いので、「あまり声を出さないで」と、頼んだ

アナルを舐めると、ウンコの匂いがしたので、

「ウォエーッ」と、言うと

直子は、嫌そうな顔をした

2人はよく、俺が持っていたビデオの WWE の DVD を見た

プロレスのものだが、

直子は粘り強く一緒に見てくれた

耳にはイヤホンをして音楽を聴いていた

映画の 24 シリーズもよく見た

ジャック・バウアーたちの迫力に、

緊張し、興奮した

真夏頃、

直子が、実家に来てよ、と云ったので、

2人でバスに乗り、

行った

実家には、直子のお父さんと、お母さんがいて

甲子園を見ていた

直子は自分の部屋に戻ったが

俺は、その両親と3人の状態

俺は、何も話さなかった

そういうのは苦手だった

もしかしたら、これが、直子の策略だったのか？ と思うこともあるが...

ただ 直子のお母さんが作ってくれた、むしパンについては

帰り際に「ほんとうにおいしかったです、ごちそうさま」とは言った

さして、直子の部屋では、漫画を読む程度で、

あまり、楽しめなかった

もしかしたら、おあいこ、かもしれない

西武ドームに野球を観に行った

チケットを買おうと

初めて、手をつないで

俺は「仲良し」とおどけながら

一緒に球場に入っていった

…

試合が終わると、球場内が開放された、

お客さんが、スタジアムの中に入っていいのだ

いろいろな人に混じって、

2人で空間を味わった

ある時は、サッカーを見に味の素スタジアムに行った

妖精、ピクシーが監督をやっていた

ドラガン・ストイコビッチである

俺が、カッコいいでしょ、と言うと

かわいいよ、と言って、わらった

俺が直子と付き合っていた時期は、一切、実家に電話をかけなかった

俺が、ピザを食べた日

「お腹が痛い」と言った

念のため、救急車を呼んだが

律儀にも、直子は、その専門の病院まで一緒に来てくれた

待ち時間もずっと一緒にいてくれた

心配してくれたのだ

俺は、特に何もなかったが、

時間だけは、もう、夜遅くなってしまった

直子には、気の毒な思いをさせたなど思っている

ある時、指輪を買うことになった

突然、直子が言い出したのだ

俺は、どこかの店で指輪を見せた

直子は選んだ

4千円の指輪だった

俺は、仕送りの金で払った

そんな、自分を恥じた

俺の目には、その指輪が歪に見えた

螺旋系である

その後、直子はその指輪をつけていたのかさえ、もう憶えていない...

一緒に料理を作った

井の頭公園を散歩した

よくよく思えば、俺は、まったく、直子との未来なんて想像していなかった、毎日、直子と会う、それだけがよかった

作業所に通っていた

ある日は、家に、直子を置いて、作業所に行くと、直子が待っていた

違う日は、家に、直子を置いて、作業所に行くと、直子は置手紙を置いて、帰ってしまっていた、その日は寂しかった...

その後も、幾度か、直子の実家に行った

鈍感だったかもしれない

直子と猫を見つけて、ミケちゃんと名付けた

直子と会ってから、いつも、帰りは、できるだけ、バス乗り場までは送っていた

だんだん、それが億劫になってしまった

「今日は、ちょっと1人で帰って」と言ってしまった

直子は、そそくさと1人で帰ったが

俺はしまったと思い追いかけた

カバンの荷物がバラバラと落ちたが

直子に追いついて「ごめん」と言ったが

直子は、冷めた顔をしていた

その後は、黙っていた

そして、決定的な日を迎えた

なんと云ったかは覚えていないが

直子に冷酷な言葉を浴びせてしまった

直子は部屋を飛び出した

すぐに追いかけて

直子はショックのせいか、地面に倒れこんでしまった

1人の少年が、レイプだと勘違いして「いけないんだ」と、喋っている

俺は、とにかく、直子を家に入れたが、直子は黙っていた

何を言っても、黙ってしまった

そして、両親が、わざわざ、車でお迎えに来てくれた

俺は、車の後ろから頭を下げた

翌日、病院で、嫌な予感はずしたが、直子に近づくと

「こないで〜！」と、言われた

俺は、冷めるよりも、前に、諦めてしまった

これで、すべては終わった

最近、直子によく似た女性を診察待ちで見る、人違いかもしれない

もう、会っても、
何も話さないだろうな

ケツメイシの「さくら」が、イヤホンの中で、流れていた...

「完」